

子どもの主体的な姿の要因

—活動に自らの判断で取り組む様になったK児の姿から—

平林 祐希奈 教職基盤形成コース 教科授業力高度化プログラム

キーワード：海外交流型学習，小学校，宛名性，一回性，イギリス

1. 問題の所在と研究の目的

信州大学教育学部附属長野小学校の6年生のクラスにおいて、2020年10月にはイギリスの一般家庭と、同年11月から2021年12月までイギリスのKing's Ely schoolと交流学習を行った。交流活動を通して最も印象的だったのは、K児の姿である。K児は交流活動が始まった頃から、興味関心を持って活動に参加していた。活動を重ねるにつれ、活動に自らの判断で取り組んでいくK児の姿がみられる様になった。

清水・加納（2020）では、児童の英語、外国語活動に対する意識への影響について海外交流型学習を通して検証した。台湾の小学校と日本の小学5年生で1年間を通して固定されているパートナーとの交流活動を行った。「田中小5年生モデル」という枠組みを用いて交流活動を行った。児童が英語や異文化、外国語活動等への意識が高まる場面を作り出し、学習指導要領の目標へ近づくことができたと述べられている。しかし、子ども達の声があまり取り上げられておらず、筆者は、それは「子ども達がしたい交流活動」ではなく、「教師がしたい交流活動」なのではないかと考えた。

先行研究において、子ども達の外国語活動に対する意識は高まっているかも知れないが、主体性という面で考えた時、主体的に活動に取り組んでいると言えるのだろうかという疑問を感じた。

そこで本研究では、K児の活動に自らの判断で取り組む様になった姿をみることでできた要因を筆者の海外交流型学習の記録を基に探っていく。

2. 研究方法

本研究では、2020年10月に行われた信州大学教育学部附属長野小学校（以下長野小）の子ども達とイギリスの一般家庭との交流と、2020年11月から2021年12月にかけて行われた長野小の子ども達とイギリスのKing's Ely school（以下キングスイーリー校）の小学部の子供達との海外交流型学習の記録を基に分析していく。

3. 実践報告

3.1 交流のきっかけ及び海外交流型学習の概要

本研究の海外交流型学習は、筆者のホストファミリーとの交流から始まった。ホストマ

ザーがよく作ってくれたお菓子のレシピをもとに実際に作ってみるという授業を行った。ホストブラザーが通っているキングスイーリー校の紹介動画がきっかけで、キングスイーリー校との交流が始まった。

キングスイーリー校との交流は、具体的な計画を立てることなく、その場の状況や両校の子ども達の姿から活動内容を決めていった。キングスイーリー校の0教員とはメールで100通近くのやりとりをし、zoom会議を2回行った。言語の違いや時差、互いの学校で使用許可されているアプリの違いなどで先行きが不安になる場面もあった。周りの先生に相談をしたり、目の前の子ども達と話し合ったりして解決していった。キングスイーリー校との交流に関する授業は1年間を通して全9時間行った。授業では、やってみたい交流活動について尋ねたこともあった。行った交流活動の内容は、キングスイーリー校からのクリスマスカード受け取り、Padlet 上での質問のやりとり、自己紹介ビデオレター交換、ポストカード交換だ。本研究の対象のクラスは竹トンボを日々追求しており、子ども達はその魅力をキングスイーリー校にも伝えたいと奮闘した。子ども達の魅力を伝えたいという声から、竹トンボを手作りで51人分制作し、キングスイーリー校に送る交流活動も行った。

3.2 活動に自らの判断で取り組む様になったK児

K児は、活動当初から興味関心を持ち、前向きに交流活動に参加していた。2月の授業の振り返りでは、「もっとキングスイーリー校の人のことが知りたい。」と記している。また、「早くキングスイーリーと交流しようよ」と5月に筆者へ呟いている。

9月、K児はやってみたい気持ちがありながらも、新しい活動内容を提案することに戸惑っていた。夏休み明けにK児はN児とS児と一緒に竹トンボの魅力をキングスイーリー校へ伝えるために動画を撮り、編集をしていた。それと同時に、竹トンボをキングスイーリー校に送るために制作もしていた。3人で51人分を作るのは大変ではないかと尋ねると、「大変だし、時間かかる…」と呟いた。「みんなと一緒に作ろうって聞いてみる？」と尋ねると、「みんなに聞いてみたい」と言ったが、しばらくクラスの仲間へ尋ねることに戸惑うK児の様子があった。

一方で、同月にキングスイーリー校のペアから届いたポストカードへ返事を書く際に、K児は「〇〇さん（ペア）にも、長野小の紹介をしたいのだけど、どうかな。」と筆者に尋ねた。「素敵だと思うよ。」と返すと、校内の写真や、K児がランドセルを背負った写真や給食の様子写真などに英語で説明が加えられた冊子が出来上がっていた。K児の背中を少しだけ押すと、K児は自らどんどん活動を進めていった。

10月、みんなに新しい活動内容を提案するのを戸惑っていたK児が中心になりながら活動を進めていた。休み時間にK児に呼ばれて席に行くと、K児はマスキングテープが貼られた下敷きを見せてくれた。そのマスキングテープには、キングスイーリー校の交流相手の名前51人分が書かれていた。「すごいね。何に使うの。」と尋ねると、「キングスイーリー校に送る竹トンボが誰宛なのかわかる様に貼りたいの。」と言った。K児や子ども達の中での宛名性の大切さを感じた瞬間だった。

また、K 児は活動を進めていく中で、「友達」について考えていた。9 月にペア宛に作成したポストカードには、“Will you be my friend? I hope you will become.”と書かれていた。その後、筆者に、K 児は「キングスイーリーのペアの子のことは友達って呼んでもいいのかな。」と呟いた。K 児の周りにいた子ども達も、「確かに。会ったことないもんね。でも、名前も顔も知っている。手紙で話したこともある。」と話し始めた。

11 月、やってみた活動を教師に報告し、確認を促す K 児の姿があった。「先生、キングスイーリーの O 先生の分の竹トンボはあるの」と筆者に尋ねた。「すっかり忘れてしまっていたよ」と応えると、K 児は「ペアの分も作り終わっているし、O 先生の分を私が作るね」と答えた。K 児は O 教諭の分の竹トンボを作り終えると、O 教諭にむけた手紙や竹トンボを飾る台座、修復するための瞬間接着剤など、相手のことを考えながら次々に活動を自ら進めていった。

12 月、51 人分の竹トンボを発送するために教室へ行くと K 児が寄ってきて「先生、あれからもう一枚ずつお手紙を増やしたの。知ってる？小さい白い便箋に書いたの。後で読んで確認してね。」と筆者に確認を促した。活動を自らの判断で取り組む K 児の姿がそこにはあった。

4. 考察

記録を通して、交流に対して K 児の様子に取り組んでいく姿が見ることができたのは (1) 宛名性のある交流活動であったこと、(2) 一回性の活動であったこと、(3) 授業者がメディアーター的役割であったこと (4) 日常的な外国語の学びに繋がられる活動にあるのではと考える。

4.1 宛名性のある活動

より多くの子ども達が主体性を持ち交流活動に取り組むためには、子ども達が誰とやりとりをしているのかがはっきりとわかる宛名性のある活動がそれらを効果的に引き出すのではないかと考えた。K 児の様子から、宛名性があることによって〇〇さんに知って欲しいと思うことや、共通点を見つけて喜ぶこともできるのではないかと考えた。宛名性のある活動だったからこそ、K 児の様に交流相手のことを友達と呼んでいいのか、友達だといいなと交流相手を友達として考えることができたのではないかと考えた。

4.2 一回性の活動

今回行われた海外交流型学習は、筆者や子ども達、長野小にとってもキングスイーリー校にとっても初めての活動で、手探りで活動を行ってきた。筆者は大学院生という立場であったため、所属学級の担任の先生である Y 教諭をはじめ、周りの先生に相談をしながらこの活動を進めてきた。先行研究では、交流活動の計画を立てたり、枠組みを設定して交流活動を行ったりしていたが、今回は計画を立てずに行った。計画を立てずに行ったからこそその難点もあったが、計画性が無い交流活動であったために、活動の柔軟性というものを獲得したのではないかと考えた。どの様な活動をしていけば良いか模索状態であったため、子

も達のやりたい活動内容に耳を傾けながら活動を行うことができたのではないか。

4.3 授業者がメディエーター的役割であったこと

筆者は、授業を行う際、指導者ではなく、メディエーター的役割を担っていた。メディエーター的役割とは、子ども達の気持ちや考えを翻訳して O 教員に伝えたり、また、O 教員から伝えられたキングスイーリー校の子ども達の様子を長野小の子ども達や教員に伝えたりする様な役割であったと思う。指導者としてではなく、交流活動における子ども達のパートナー的存在で入れたことが、K 児の様な活動の様子を見ることができた要因の 1 つであるのではないか。

4.4 日常的な外国語の学びに繋げられる活動

K 児の様子から、家庭科室や理科室の英語での言い方や、そもそも、家庭科ってイギリスにはあるのかななどの異文化に関する疑問などから、キングスイーリー校の子ども達へ伝える内容や考えたい内容は自身の「日常生活」に関わる内容が多いということがわかった。しかしながら、子ども達が日常生活に関わる外国語に触れ、外国語を発する機会が増えても、子ども達にその単語や文章が定着しているかどうかはテスト等を行っていないため不明である。交流学习で学習した内容の定着については今後の課題である。

5. 終わりに

宛名性がある活動、一回性の活動であったこと、授業者がメディエーター的役割であったこと、日常的な外国語の学びに繋げられる活動が K 児の様に活動に自らの判断で取り組む姿がうまれた要因であると考えられる。初めての活動で不安になりながらも、模索して活動を進めていくことで、子ども達が活動に入り込む隙がうまれたのではないだろうか。

一回性の活動の課題として、一度同じ活動内容を経験している教師の理想や計画と、新しく出会い学んでいく子ども達とのズレが生まれるのではないかと思う。海外交流型学習だけでなく学校で様々な活動を行っていく時には、たとえ教師が一度経験していたとしても、一回性を常に意識して活動に取り組んでいく必要があると強く思う。教師が何度も経験している活動を行っても、教師の気持ちの持ち方次第で一回性と言えるのではないだろうか。常に、子ども達が入り込める様な隙のある活動を意識していけば、K 児の様な姿の子ども達が生まれるきっかけにつながると思う。

文 献

清水義彦・加納幹雄 (2020), 小学校外国語活動で使える海外交流を組み込んだ年間指導計画と実践—単元の最終タスクは海外の小学生との交流活動の 1 年のまとめ—, 中部地区英語教育学会紀要, 第 49 巻(2020), p.227-234